大学ジャーナル FREE

vol.128 12月号
第22巻5号・通巻128号

発行所：くらむぼん出版　〒531-0071 大阪市北区中津1-14-2
TEL06(6372)5372 FAX06(6372)5374
E-mail KYA01311@nifty.com

大学ジャーナル UNIVERSITY JOURNAL ONLINE
http://univ-journal.jp

Highlight

05 連載 16歳からの大学論
シリーズ 大学が地域の核になる
京都文教大学の挑戦

06 ススメ！理系
技魔女が語る、
工学女子から見る日本の課題

07 ススメ！理系
古典籍へのアクセスが
飛躍的に向上。人工知能（AI）を
使ったくずし字の解読も始まり、
古典の学びがより身近に
国文学研究資料館　古典籍共同研究事業センター
副センター長　　山本和明先生

08 大学の学びの積み重ねが、
就業力を高める
法政大学キャリアセンター

09 デキる！学科
スポーツを《する》から
《はかる》《考える》へ
静岡産業大学スポーツ人間科学部
（仮称、設置構想中）

10 大学ジャーナルオンラインから

12 USC卒業生は語る 前号に続く
博士課程教育リーディング
トピックス プログラムフォーラム2017
『はかせだものみんなちがってみんないい
～自分のキャリアを開くための「意思決定」
のヒント～』が開催

本年最終号お届けします。来年は5月初旬のスタートを予定しています。前々号、前号、今号と、紙面の都合で連載の一部をお休みさせていただいたことをお詫びします。最後になりましたが、受験生の健闘をお祈りいたします。

『哲子の相談室』の筆者、
北岡哲子先生の
新刊が出ました。

日本文理大学特任教授
北岡　哲子

大学トップからのメッセージ 特別編

京都大学総長と首都圏進学校校長座談会

Ver.Ⅱ　第3回（通算第9回）

2009年11月19日に始まり、通算9回目となった本座談会。
この間、秋入学に始まり、大学入試改革についての議論も加速しました。
今回の大学入試制度改革には、いくつかの伏線と様々な背景、要因が考えられますが、
その一つに、若者の間に広がる過度に正解を求めたり、決められたレールの上を進むことを
良しとするようなマインドに対する、産業界や大学の危機感があったことは否めません。
大学入試改革にどこまでインパクトがあるかはともかく、高大接続、記述式、多面的・総合的評価などのキーワードは、
この文脈の中に置くことで初めて意味を持ちます。
今回はグローバル社会の中を逞しく生きていくのに欠かせない「失敗を恐れず挑戦する心」、「挑む心」を育むために、
大学は、高校は何を課題としてその解決にどのように取り組んでいるのかを軸に話し合っていただきました。

（10月12日学士会館にて）

高校と大学の対話を深めよう

挑む心をどう育てるか、2020のその先へ

京都大学総長
山極　壽一 先生

Profile
1975年3月 京都大学理学部卒業
1977年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
1980年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程研究指導認定
1980年5月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程退学
1980年6月1日 日本学術振興会奨励研究員
1982年4月1日 京都大学研修員
1983年1月16日 財団法人日本モンキーセンターリサーチフェロー
1988年7月1日 京都大学霊長類研究所助手
1998年1月1日 京都大学大学院理学研究科助教授
2002年7月16日 京都大学大学院理学研究科教授
2009年4月1日 京都大学教育研究評議会評議員（2011年3月31日まで）
2011年4月1日 京都大学大学院理学研究科長・理学部長（2013年3月31日まで）
2012年4月1日 京都大学経営協議会委員（2013年3月31日まで）
2014年10月1日 から現職
東京都立国立高等学校出身

京都大学のこの1年

山極　大学は今、様々な改革を加速させていますが、その柱は、国際化、産学連携、自律的な資金の確保の三つです。

国際化は教育面では学生のモビリティを高めることが目的です。京都大学でも100を超える大学と大学間学生交流協定を結び、単位互換の仕組みなどを整備することにより、一旦は京都大学に入りそこから海外へチャレンジするという選択肢を用意しています。

様々な留学の形があってもいいということで、『おもろチャレンジ』（京都大学体験型海外渡航支援制度―鼎会（かなえかい）プログラム）を昨年から始めています。期間は3週間以上で、行先は大学に限りません。学生自身で企画し、行先の選定、事前交渉など全て自分でやってもらいます。30件を目途に、審査に通れば上限30万円を支援します。昨年は115名の応募の中から31件採用しましたが、行先にはアフリカなども含まれています。今年は昨年より多い143件の応募があり、予想より学部生が増え、しかも女子が多くなっています。一昨年から開始した『学生チャレンジコンテスト』は、学生自身が活動計画を立てて、それがおもろかったらwebに掲載し、一般の方々からクラウドファンディングで資金を集めるというものです。他に「学際研究着想コンテスト」というのもやっています。

高校生に大学からのメッセージを伝えるのも非常に重要であり、毎年、高校生に模擬授業を提供する『サマースクール』を、また都道府県の教育委員会等との提携による『サイエンスフェスティバル』も行っています。サイエンスフェスティバルでは、選ばれた高校生のチームには京都大学に来てもらい、発表して競ってもらいますが、高校生とは思えないようなアイデア、取組もあります。理学部から始まった『ELCAS』では、本学の教員が月二回、週末に高校生たちへ大学と同じような内容の講義や実験・指導を行っています。講義・実習を行う基盤コース19分野に135名、研究室に配属され少人数制で実験・実習を行う専修コースに18分野28名が参加しています。また、今年度からは分野を人文系にも広げています。

特色入試は、当初ハードルが高いのではと避けられる傾向もありましたが、熱意があれば、能力以外の要素も選考の対象になると説明を続け、徐々に高校や高校生の理解が広がってきたと実感しています。入学してきた学生がどれぐらい伸びるか、大いに期待していますし、今後さらに枠を広げていきたいと思っています。

産学連携では、日本の指定国立大学法人制度の最初の3大学に選ばれました。自然科学分野だけではなく、人文社会科学の牽引者となることが期待されているというのが意外でしたが、元々京都学派と言われるベースがありますから、きちんと人文社会科学系の学問から立て直し、それを国際的に発信していく核を作りたいと考えています。その一環として掲げたのが、『吉田カレッジ構想』で、日本語で講義やセミナーを受けられる留学生を募ります。また、優秀な学部学生を海外から募り、日本人学生と混住する寮を現在建設中です。現在、大学院生中心に2,200人ぐらいの留学生を、数年のうちに4,000人以上にしようという計画です。

その他、リカレント教育として、京都の文化芸術系の国公私立9大学と組んで10大学で、『京都アカデミアフォーラム』を立ち上げ、この秋には東京丸の内に専用のオフィスを開設しました。

挑む心をどう育むか――参加校は今

杉山：今年も16人京大にお世話になりました。『吉田カレッジ構想』など、京大のグローバル化は着実に進んでいると感じました。今日のテーマでもある、チャレンジする若者を増やすために、大学もいろんな仕掛けをしていると感じると同時に、高校では、まだまだそれが大きな課題として残っているのではないかという気がしています。全般的な印象では、今の生徒には失敗することを恐れたり、安定志向に走ったりする気質がありますが、それは保護者にもあると思います。それを打破するにはいろんな仕掛けが必要ですが、本校は男子校ということで、「無理難題に挑戦しろ」と様々な取組を行っています。その一つが50キロを7時間で歩く古河強歩大会。こういう取組に仲間と一緒に挑む中で次第にチャレンジするマインドが育ってきます。また一年中、スポーツ大会をしています。クラスマッチで教員チームも必ず入りますが、とても強く、自分たちを乗り越えてこいとばかりに盾になっています。このように教員が矜持を示すことも大事です。学校として様々な仕掛けを作り、その上で保護者の意識も変えるよう働きかけることが大事だと考えています。

稲垣：3年生の京大への志望は増えていて、来年度も20名弱は受けてくれると思っています。進路選択には、先輩たちが戻ってきて話をしてくれるのがとてもいい刺激になりますが、京大生は研究系の話や、興味のあることをいろいろやっていくのが面白いという話をします。今日もまた『おもろチャレンジ』のお話をお聞きして、学生にすべて自分たちで考えさせるという考え方を、大学で取り入れてくれているとのことで、高校側としては非常にありがたいと思っています。

本校の体育祭も生徒だけで作り上げていく一大プロジェクトです。3年生が、2年のこの時期に引き継いで一年間かけて生徒だけで作り上げていく。引継ぎのための膨大なマニュアルにも見るべきものがあります。生徒だけで作り上げていくことで、見えない力の育成に大きく寄与していると考えています。それがあるからこそ、体育祭が終わると急きょギアを入れ変えて受験勉強に臨みます。校長としては、失敗を恐れる子たちが少し増えてきているように感じていますから、ハードルをもう一歩越えるために何を仕掛けていくか、それがこれから非常に重要になってくると思っています。

吉野：今の子どもたちには失敗を恐れ、親が敷いたレールの上を素直に進む子が本当に多い。下手するとそのまま真っすぐ、周りを見ないまま、失敗しないままで大人になってしまう場合もある。そこで15年ほど前から、思春期の前半に当たる中学3年間では、家庭でやるべきさまざまな後押しを、生徒指導、生活指導として学校でも援助しようということになり、今ようやく軌道に乗ってきたところです。具体的には、まず3日に一回、席替えします。いろいろな価値観を持つ子とぶつかりあい、親から与えられた自分の価値観だけが正しいのではないことに気づかせ、それを乗り越えて価値観の違う他者と一緒に行動できるような環境を作ることで、チャレンジしながら失敗を恐れない子に育ってほしい。またアサーション（自己表現）トレーニングも取り入れていて、コミュニケーション能力を高めることで、クラスを越え、学年を越え、学校を越え、さらには国境を越え、文化・歴史観の違う国の人と、明日の平和な世界を一緒に作っていく能力が育つのではないかと期待しています。

本校の考えるグローバル化とは、国際競争に負けてしまうから頑張れと言うのではなく、価値観の異なる隣の子と一緒に行動できる資質を伸ばし、世界の中で活躍できるように自分の枠を外に広げていくこと、一歩踏み出してチャレンジできる素養を育てていくことだと考えています。これは、入学段階で「もう少しチャレンジしておけば良かった」などと考えている生徒の意識変革にもつながると思います。

柳沢：開成では、中学1年生は1学期の学校行事や部活の経験を通じて、ロールモデルとしての先輩を見習うことで、自主性、自律性を養います。進路選択についても、教員は口出ししません。最近は海外の大学に行く卒業生も増えていますから、その影響からか、学校全体で今年は40名強が海外のサマースクールに行っています。部・同好会活動は70ほどあり、おおむね自分がやりたい部活は揃っています。OBによる億単位の寄付金を基金にしたのが『ペン剣基金』。自分がしたい研究を、大学の教員のように申請書を書き、審査を受ける。誰でも、つまり中学1年生でも、教員でも参加できます。審査を通ると平均20～30万くらいのお金が使え、最後に報告書を出すことが必要です。チャレンジできる場、機会がたくさんあり、生徒たちは親とべったりとくっついているのが恥ずかしいという感覚を持つようになりますから、一番寂しい思いをしているのは母親かもしれません。

梶取：本校は自由と自立を重んじる学校と言われていますが、昔に比べると生徒ははるかに小粒になってきています。また男子校とはいえ、以前よりはひ弱になっている。これには親との関わり方

京都大学総長と首都圏進学校校長座談会

高校と大学の対話を深めよう

の影響が大きいと思っています。

今や高校も大学もグローバル化一色ですが、私は、海外に限らず、外に出ることを「広義のグローバル化」と捉え、そういう機会を増やし、まずは生徒の足腰を鍛えたいと思っています。授業だけでなく、校外学習など様々な体験をさせながら、英語の4技能の強化だけでなく母語の4技能をきちんと身につけ、何にでも挑戦できるタフな生徒を育てたい。まだ模索中ですがそう考えています。

山極：それには個人指導、一対一の対話が必要で、そういう環境を作ることも大事だと思います。どれがフィジビリティが高いのかを見抜く力などは、経験のある人に少しだけサジェスチョンをもらうだけでずいぶん違ってきます。

梶取：将来、シンギュラリティが来ると言われる中で、単に技術を学ぶだけならおそらく学校はいらなくなる。やはり専門

ことが少し気になりました。おもろチャレンジに応募してくる学部生は、将来はともかく、とりあえず今はこれをしてみたいということでしょうか。

山極：学部生の企画には、フラダンスを習いにハワイに行きたいなどの、将来の研究キャリアと全く結びついていないものもあります。自分の思いを第一にして、裸一貫で行ってやり遂げてくる、それは将来の目標に直接結びつかなくても大きな力になるはずです。高校現場では誤解もあるかもしれませんが、われわれは学部生を大学院で囲い込みたいとは思っていない、可能性を伸ばすためには他へいってもらってかまわないと思っているからです。

佐藤：高校生にもこういうチャレンジをさせたいですね。大学に進んで、自分の研究をもっと深めていくのが、「チャレンジする」ということではないかと思います。本校でも総合学習での調べ学習や、『千葉高ノーベル賞』などがありますから、こういう形でどんどん研究にチャレンジし、集団の大人がいて、いいこと悪いことも含め、いろいろなことを学べてこそ学校だと思います。

百瀬：確かに今の生徒、家庭は成功志向が強いと思います。また、反抗期を迎えないまま卒業していく生徒がいるのではないかとも懸念しています。母親が敷いたレールに乗り、冒険しない。他流試合も怖がる。反面、SSHで課題研究に取り組む生徒はタフになっていきます。そこで今は、課題研究を理数だけではなく、人文社会系にも広げています。1年から開講し、何にでも挑戦する態度を育むきっかけの一つにしてほしいと。生徒には、家庭事情や経済的な問題を踏まえつつも、いろんな体験をさせ、より深く考え

その上でこういう大学に行きたいというようになってほしい。まず大学に入っておいて、チャレンジは大学院でしょう、あるいは海外に出ようと考えているのを、高校や大学でも「チャレンジする」としたいと、今日のお話を聞いて感じました。

平：男子生徒には、《マニアになる脳》というか、興味・関心が湧くと深掘りする子が多いですから、知識をいかに定着させるかより、いかに刺激を与え続けるかが学校の役割になると考えています。そのための一つが国際交流であり、もう一つが『教養総合』です。後者は2004年から始めたもので、高1、高2で学年の枠を取

る必要のある機会を作って、一歩先へとステップを踏んでいってほしいと思っています

本校では生徒の動機付けについても工夫していて、その一環として大学の先生だけでなく卒業生、企業の研究所などからもゲストを迎え、話を聞かせてもらっています。

山極：動機付けにはやはり、時代の高みに上り、先を見る必要があると思います。具体的な目標を立てるまでは必要ないと思いますが、産業界でもアカデミアでもいいから、そこで頑張っている人たちの話を聞くことはとてもいいと思います。

佐藤：『おもろチャレンジ』に一番興味を持ちました。特に院生よりも学部生にもっとチャレンジを促す仕掛けを考えられていることです。この春、千葉高に赴任して、まず大学に入り、大学院に入ってから頑張ればいいと考えている生徒がいる

り払って土曜日に2時間、基本的には少人数授業で、人文、語学、芸術、スポーツ、科学、それとリレー講座に分けて、各学期で一つ取ることになっています。必修で、高1高2で全部で6種類取ることになります。当時大学では教養教育が縮小され、一方、大学入試に特化した効率的な勉強を重視する生徒が増えてきていたため、教養教育を高校で担おうとわれわれ教員が始めました。やはり学校は、刺激を与える装置を用意するのが一番大事だと思っています。

山極：スポーツと違い、学問の力は複線で伸ばしていかなければなりませんから、一つのことばかりやるのは考えものです。ここで修めたことが別の場面で活きるわけですから、将来、方向転換できるような幅の広さをもつことが学問の豊かさ、可能性につながると思います。

杉田：『おもろチャレンジ』は本校のSGHの取組とよく似ています。「ローカルな生物資源を利用してグローバルな製品として発信しよう」というテーマの下、市場調査から海外フィールドワークまで行います。海外に出たり、会社を起こしたりなど、かつての高校生からすれば夢のようなことが、手の届くところにある。このよ

うな取組がきっかけになり、チャレンジするための壁は低くなっているのではないかと思います。ちなみにこのプロジェクトに参加した生徒の一人は特色入試で合格させてもらいました。京大へは毎年6名程度で行っていますが、興味を持つ生徒も相当数いますから雰囲気もあっているのかなという気もしてきました。

挑む力ということでは、ご出席の公立校同様、生徒には第一希望は譲らないというようなところがあり、浪人率は高いほうだと思います。また勉強だけでは人間の幅を広げられませんから、学校生活の中でできるだけいろんなことに挑戦できるように、いろいろな仕掛を用意しています。典型的なのが『一高祭』と『歩く会』、そして『一高オリンピック』と呼ぶ体育祭です。どれも、生徒が実行委員会を作り自分たちの手で作り上げていき、教員はサポートに回るだけです。かかり集団とか小集団の中で、失敗も成功も味わうことで、自信がついてくる。自信がないと何事にも挑戦できませんから、学校行事、部活も含めて学校の中で、自己肯定感や自信をつけさせ、挑む心を後押していくのが公立学校のやり方ではないかと思っています。

卒業生の声は、やはり生徒の進路に大きな影響を与えます。学部生、特に1年生が、どれだけ入学後に充実感を感じているか、逆に言うと、大学が学部生をどれだけ大切にしているかが、必ず次の世代に如実に反映されてくると思っています。

山極：SGHやSSHで学び、野心を持って大学に入ってきても、それにきちんと応えられないようではまずいと思います。生意気な学生は生意気なりにいろいろなところで芽を出してほしいですから、まずは1、2回生でそのためのチャンスを与えたい。1回生の野心をどれだけ伸ばしていけるかがこれからの大学のミッションでもあると思います。

岸田：3年前から京大ツアーを始め、今年は40名参加しました。本校の雰囲気は体育祭と文化祭の違いはあれ湘南高校と似ているかもしれません。文化祭では、3年生は80分の演劇を2日間で8回こなします。お客さんも今年は二日間で1万1717名来られました。1年生のアンケートを見ると、大体6割が文化祭に惹かれ、あと部活動にもということで来ています。その点では同質の生徒が増え、昔に比べ全体的に小粒になってきているかもしれません。ただ、文化祭を引き継ぐ際には、毎年改良していこうとしていますから、まだまだチャレンジ精神は旺盛だと感じています。SSHやSGHの指定は受けていませんし、学校で3年間過ごしたいと海外留学にも行きたがらない生徒が多いですから、その目を、いかに外に向けさせるかが一番の課題だと考えています。

竹鼻：昨年度「宇宙リチウム問題」の研究で京大総長賞を受賞した卒業生が、7月の『土曜未来講座』でその話をしてくれました。実は4年前にもこの卒業生に「理系の先輩に学ぶ」という『土曜未来講座』をしてもらい、その影響もあってか、今年は浪人生も含めて、京大に9名入学させていただきました。女子は自信が持てない子が多く、100％自信がないと手を上げられない。そこで、憧れの先輩と接したり、生徒同士で学内外での取組を報告し合ったり、「自分もできるかも」と思わせる仕掛けをたくさん用意しています。海外研修は30年ほど前から行っています。価値観の違いに気づき、親元を離れて他人の家で過ごすことで自立が図れます。英語の上達より、苦労を味わう経験の方が大切な学びだと感じています。3年前から3カ月留学も始め効果を上げています。

山極：いよいよ女子寮を改築します。きれいになり収容力も増す。女子学生の割合も増えています。とくに工学部の建築やかつての土木系（地球工学科）ですね。もともと医学系は多いし、教育でも女子の比率が高くなっています。理学部も私のころは300名のうち8名だったのが今は一割になりました。農学部も、農業を志向する女子が目立ってきたこともあり、増えています。京都は市民が学生を手厚くサポートする。特に女子学生にはみな注目しています。東京にいるのとは全く違う雰囲気を味わえ、親からも独立していけますから、ぜひ来てほしいと思います。

鵜崎：本校の生徒には男子校の生徒のようなところがあります。チャレンジ精神に溢れ、好奇心も強く、何かやりたいと思っている生徒が多い。人生最大のカルチャーショックは、女子学院に入学したときだったと言う卒業生もいるほど、個性的な生徒が集まっています。京大にお世話になる生徒が一昨年は多かったですが、昨年はそれほど多くなくブームにはなりませんでしたが、特色入試には反応し、今年もその勢いは続いているようです。

いろいろな大学から出張授業などのお話をいただきますが、生徒は学校を介しての情報にはあまり触手を伸ばしません。自分でオープン授業などを見つけて入り込んでいくことに喜びを見出すのが主流のようです。

首都圏の大学に進学する生徒が多い中で、遠方に行きたいという生徒もいますが、保護者がなかなか離したがらないのと、外的な要因で諦めることもあります。口にはあまり出しませんが、小学生で塾に通い、その後６年間、私立の授業料を払ってもらっていますから、親にずいぶん経済的な負担をかけていると考えるのでしょう。

学校としては、生徒が元々持っている興味・関心をできるだけ持ち続けられるように指導しています。生徒は目標を決めるとそれに向かってまっしぐらになり、それらを一つずつ削ぎ落としていきます。しかし将来、それらがどういう形で役に立つかはわかりません。ただ、柳沢先生のところと同じで、あまりこちらが言うと乗ってきませんから、言い方には十分注意しています。

山極：生徒が選んでくるのは先生ですか、学問のタイトルですか。

鵜崎：学問のタイトルに先にピンときて、そこから研究内容や先生に関心を持つようです。

山極：両方必要だと思いますが、これからの学問は、教える側と学ぶ側が一対一になることが大事ですから、先生がすごく重要になってくると思います。そこで附置研でおもろい研究をしている先生たちに発表してもらって高校生との対話の機会を設けたり（京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言」）、変人を自称する先生の研究に芸人がツッコむ『京都大学変人講座』というのをやっています。一方で、この先生の下で学びたいという気持ちを抱かせるような人をどんどん作らないといけないとも思っています。東京でもやれば高校生は来てくれるでしょうか。

鵜崎：見つけたら「私が」と。でもみんなで一緒に行こうとは思わない。自分だけが知っていることに心地よさを感じているところがありますから。

齋藤：本校には小学校でリーダー的な存在だった子と、全くそういうこととは無関係だった子が入ってきますが、前者の中には、全員がリーダーになる必要はないとわかり、自分でそれまで意識してこなかったような能力に気づく子も出てきます。それはそれで悪いことではありませんが、最近少し気になるのは、「輝けない」と不満を漏らす生徒がいること。成績もピカピカで何をやっても目立って、親子ともにみんなからすごいねって思われないからつまらないのだという意味のようです。もちろん6年間の間には、積極的にやろうという子と、そうでない子とは出てきます。全員に自己肯定感を持ってもらえるよう努力しているのですが。

文化祭、体育大会は、本校でも立候補した実行委員が運営していきます。女性教員が多いので、いきおい細かくなりすぎたり、母親になりすぎたりしてしまうきらいもあります。教員が乗りこえるべき壁になることは必要ですが、生徒の自由な発想を妨げてはいけないと、自分たちでも注意しています。

母親の影響は、男の子ほどは強くないと思います。同性である分批判的で、「あの人の言うことは気にしないでください」のような言い方をする生徒もいますが、それはそれで正しい成長かなと思っています。

大学で地方に行く場合、東京にいるとほとんどの学問が地元の大学にありますから、保護者を説得する必要があります。その際の切り札は「医学部に行くから」が多い。親御さんが少しずつ子離れをしていくにはそれなりの理由も必要です。「この大学のこの先生の下で学びたい」などというのもいいと思います。保護者を説得するのも子どもの成長につながるかなとも思っています。そこで親が立ちはだかってはいけませんとお伝えしますが、子どもに「どこでもいい」と言いながら、親の希望を叶えるよう求める例もあります。

女子生徒には男子生徒とは違う力をつけてほしいと思います。女子校にいる間は、「女のくせに」も「女の割に」も言われずに過ごしていますから、大学や社会でそう言われた時にめげない強さが必要です。また結婚、出産でキャリア上、足踏みをすることは必ずありますから、「後ろに下がったのでは？」と思った時も、足踏みを続けていたらいつか前に出られると考えるしぶとさも必要です。それがないと、どんな仕事も続けていくことはできません。そういう強さとしぶとさを、中高の守られている間に身につけさせてあげたいと思っています。０か100かしか考えられないのが優等生の一番の弱点ですから。

武内：『吉田カレッジ構想』は京大のキャンパスに世界を持ってくるということだと思いますが、私も、「勉強と行事や部活に頑張った子は自らの進路実現も諦めない」といった伝統的な学校経営の価値観を、「世界の中での日比谷」の視点で捉え直す必要があると考え始めています。SSHや東京グローバル10で、生徒を引率して行ったハーバード・ケネディスクールでは、韓国、中国、インドからの留学生が圧倒的で、日本人は1％程度にすぎません。視野を広げ、世界に人脈を広げた彼らが自国に戻り、仕事に、研究に、行政に携わっていくことを考えると、日本の将来に強い危機感を感じます。生徒は生徒で、有名な大学の先生や学生との懇談を通して、将来の目標が明確になり、学習意欲も高まったという者が出る反面、多くは自分の未熟さを意識して、学年が上がるにつれ自己評価が下がっていきます。しかしこれは、次の学びのステップにつながるものでもありますから、今年からはニュージーランドと韓国に姉妹校を作り、短期の交換留学も始めました。異なる価値観を持つ高校生とのつながりの中で、自らの学びについて考え、モチベーションを高めていく。まだまだ解は出ませんが、私自身も挑戦しながら、生徒たちにも挑んでいってほしいと考えています。終

ご発言の各先生方の敬称および司会の言葉は、紙面の都合で省かせていただいています。

座談会へのメッセージ

東京都立西高等学校校長
全国高等学校長協会会長
宮本　久也先生

「世界に通用する大きな器を作る」――生徒が文武二道にチャレンジする中で、主体性を育み、豊かな人間性を涵養することを目指す本校においても、近年は挑戦よりも安全・安定を志向する生徒が目に付きます。大学受験に際しても、保護者の意向に沿ってか、浪人覚悟で挑戦する生徒の割合が少なくなってきています。もちろんこれは、大学院重点化や、就職氷河期以降の就職に強い大学志向などによって、学部段階であえてチャレンジする価値が低下していることによるのかもしれません。ただ教師から見て、18歳段階でのチャレンジを先へ延ばすことは、いずれどこかでそれに迫られることを考えると決して好ましいことではありません。またそれが、「頑張らなくてもいい」というような風潮につながらないかとも懸念しています。

インターネットの普及で、知を授ける場としての高校や大学の役割は低くなってきているのではないかとよく言われます。しかし一方で、「面倒見の良さ」が生徒・保護者の学校選びの一つの指標になっているように、教えられること、正解を与えられることに慣れた子どもたちにとって、その役割は逆に高まっているとも言えます。また核家族化や地縁血縁の希薄化などを背景に、学校には、様々な個性の集まる場の持つ教育力も期待されるようになりました。このことは、学問を教えることを通じて人間を作る、若者を大人にしていく場でもある大学についても言えるでしょう。特に、対話を根幹とする教育で優れた学生を育てようという京都大学のような大学には、それが強く期待されていると思います。

大学入試制度改革にはこれまで、「高大接続システム改革会議」を中心に関わってきましたが、関心が各大学の個別試験へと移る中、各大学それぞれの学部が、どのように対応してくれるのか、その教育改革とあわせて見届けていきたいと思います。また過去5回参加した本座談会については、その中から首都圏公立進学校交流会が生まれ、今はその輪が7校に拡大、校長のみならず教員・生徒の交流も始まるなど、都県を超えた公立高等学校の連携のきっかけともなったことを付記しておきます。

16歳からの大学論　第13回　その2

研究者の興味・関心とは？

京都大学
学際融合教育研究推進センター
准教授　宮野　公樹先生

Profile
1973年石川県生まれ。2010～14年に文部科学省研究振興局学術調査官も兼任。2011～2014年総長学事補佐。専門は学問論、大学論、政策科学。南部陽一郎研究奨励賞、日本金属学会論文賞他。著書に「研究を深める5つの問い」講談社など。

前回は、興味・関心は誰しもが持つものなのに、大学に籍をおく研究者の興味・関心だけ特別扱いするのはなぜだろうと述べ、結論として「なぜ研究者だけが興味・関心を突き詰めることを仕事として許されるんだろうという問いをもった研究者のみが、その興味・関心を突き詰めるに値するのだ」と締めくくりました。今回はこの結論について詳しく述べます。

素朴に考えると、研究者がその興味・関心を突き詰めることが許されるのは、社会や万民のために役立つから、と回答できそうです。しかし、この「役立つ」という言葉は、本連載第9回「役に立つ研究or 役に立たない研究?」で述べたようにとても曖昧なもの。あらゆる事柄が、いつ、誰にとって、どのように「役に立つ」のかは、まったくわからないからです。言い換えれば、すべてのものが「役に立つ」といえるのです。であれば、研究者がその興味・関心を突き詰めることが許される理由として、「社会や万民のために役立つから」というのは妥当な答えとは言えないでしょう。では、どう考えればいいのか。

それは、第11回「研究と趣味はどう違う?」で述べた結論と実は同じなのです。ここでは、蝶の収集を趣味にする人と蝶の研究者の違いについて取り上げ、研究者は蝶の収集や情報を得ることより、その背後にある原理や法則に関心があると述べました。つまり、蝶を超えたところでの不思議について探求しているのです。大学研究者においてはさらに問いを深め、「では、原理や法則をなぜ自分は知りたいと思うのか」というところまで自問しなければならないと書きました。それについて、この回では満を持して丁寧に追っていきます。

例えば、研究者の自問自答とはこういったものです。「私は蝶の研究者だ。なぜ蝶が好きなのか?それは蝶に美しさを感じるからだ。蝶のどういうところが美しいと感じるのか?色形というより、その生き方だ。ずっとさなぎだったのに突然美しく変態し、1年もたたずに死を迎える。それがなぜ美しいのか?老いて死ぬ人間とはまったく逆だからかもしれない。死の直前が人生で一番輝くときであるとは!では、なぜその人間との違いに惹かれるのか?自分は死が怖いのか。いや、正確に言うと死の迎え方になにか理解を得たいのかも知れない・・・」。

自問もここまでくると、すでに個人の興味・関心を超え、万民に共通する死にまつわる考察へと昇華しています。筆者は、この領域で思考し研究することが学問をになう大学での研究者に求められることだと思うのです。これは決して、死について研究すべきだと言っているのではありません。あるいは、蝶の研究を「通じて」、自分を含めた人というものを探求せよと言いたいのでもありません。蝶の研究と自分を含めた人というものの探求を「重ねる」こと。蝶を見ながら自分、そして人間を見る。その方法と想いこそが学問の姿であり、それなしで研究を進めても単に細かくなるだけで、大勢の人に「好き勝手にやってるだけだ」と思われるような研究に間違いなく陥ります。それは、一つ問いを解明するとまた次の問いが生じるだけで、どこまでやってもきりがなく終わりがないからです。終わりがなければ続ければ続けるほど、どんどん問題設定が細かくなり、現実から乖離したものになるのは当然のことです。しかし、大学でやる本来の研究、すなわち学問のための研究は、「役に立つor立たない」といった損得勘定を超えた味わい深さを、その成果を通じて人類に与えることができる。なぜなら、「人間をみたい」という根源的な問いが、個別の研究の背景に存在するからです。そして、それは問いそのものを客観視する目を持ち、なぜ問うのかという問いとともに研究を進める中からしか生まれないのです。

最後にきっちりと、「なぜ大学で働く研究者だけが興味・関心を突き詰めることを仕事として許されるんだろう」という問いに答えるとするなら、それは「研究ではなく学問をしている」からだということになるでしょう（続く）。

シリーズ　大学が地域の核になる―京都文教大学の挑戦

京都文教大学が、学生、地元企業、行政、経済団体を繋ぐ！

『京都文教ともいきパートナーズ』による「高・大・地・産」接続への挑戦!!

京都文教大学は、2014（平成26）年に文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に採択され、「京都府南部地域ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材」を事業テーマに、京都府宇治市、京都市伏見区を行政パートナーとして、教育、研究、社会貢献の3本柱の事業を展開しています。このCOC事業で育んだ学生の地元定着をめざして、2016（平成28）年度から、「地（知）の拠点大学による地方創生事業（以下COC+事業）」にも参画し、京都府全域での就職率アップにつながる取組を進めてきました。

2017（平成29）年度から、「COC+事業」の一環で、建学の理念である「共生（ともいき）」に賛同、共感いただき、学生の育成等にご協力いただける京都府南部地域の企業や事業所を「京都文教ともいきパートナーズ」として募り、ネットワーク化を図っています。

2017年7月と11月には、この「京都文教ともいきパートナーズ」に参画、関心を示している企業や事業所、宇治市、城陽市、久御山町、京都府山城広域振興局の行政関係者や商工会関係者、京都中小企業家同友会の宇治支部、伏見支部の会員企業、正課科目「地域インターンシップ」の受入先のみなさまと意見交換会を行いました。

7月の意見交換会では、「若者の地元定着」をテーマに、学外40名、学内15名の総勢55名が熱く議論を交わしました。このときに話題として多くあがったのが、「インターンシップ」。11月の意見交換会では、「インターンシップの可能性」をテーマとしましたが、学内外から60名近くの方々が参加しました。

当日は、インターンシップの現状について、京都文教大学の「地域インターンシップ」を事例に大学担当者、受入先担当者、学生が3つの視点から話題を提供し、その後、2018（平成30）年度以降の「地域インターンシップ」の展開、プログラム内容について、グループディスカッション、意見交換を行い、提案やアイデアも出し合いました。

地域におけるキャンパスネットワークとしての「京都文教ともいきパートナーズ」は、インターンシップ以外にも、地元企業・事業所と協働したPBL（Project Based Learning）や学生のキャリア教育、学生と社会人の交流機会の創出、京都府南部地域における人材・異業種交流の場づくり、社員・職員研修や勉強会への教職員の派遣などを行うなど、活動範囲は多岐に亘ります。そして京都府南部地域を「ともいき（共生）キャンパス」と見立て、地域ぐるみで学生、若者を育成するために、「高・大・地・産（高校・大学・地域・産業界）」の接続に挑戦していきます。

進路のヒント ススメ！理系 技魔女が語る、工学女子から見る日本の課題

「リケジョ」などの言葉も生まれ、女子の理系の大学への進学が注目されてきましたが、最近ではさらに、女性活躍推進法の制定や働き方改革の推進、イノベーションが求められる中での多様性の確保などの観点からも、それを後押しする声は一層高まっています※1。
リケジョの中でも最もなり手が少ないと言われるのが工学分野。一般的には、進路選択時における科目適性や保護者の意向、大学での研究環境などが原因とされていますが、企業の第一線で活躍している先輩女子の目にはどう映っているのか。日立グループの女性「技術士」※2で作る「チーム・技魔女」の創設者千木良美由紀さんと、若手メンバーのおひとり秋山梓さんに、日ごろのお考えについてお話いただきました。

※1　先ごろのOECDによる調査発表では、2014年における日本の女子の大学等の高等教育での理工系への進学は、加盟国35か国中最低の16%だったとされる。工学、製造、建築が13%、自然科学、数学、統計が25%でいずれも最低。
※2　国家資格。「国によって科学技術に関する高度な知識と応用能力が認められた技術者で、科学技術の応用面に携わる技術者にとって最も権威のある国家資格」とされる。21の技術部門からなる。試験には1次、2次があり、2次試験の受験には、原則として7年（総合技術監理部門は10年）の実務経験が必要。

㈱日立建設設計 **千木良　美由紀** さん　　㈱日立システムズ **秋山　梓** さん

技魔女とは？「チーム・技魔女」は何をしている集まりですか？

千木良：「チーム・技魔女」は日立グループ、約30万人の社員の中で、技術士資格を持つ女性で組織されたチームで、メンバーは現在16人。女性として、チームとして、何かを社会に物申そうというわけではなく、協力を求めたいときに、お互いに情報を共有できるプラットホームがあると良いということで始まりました※3。女性技術者として問題を共有できる仲間意識があり、しかも少人数だったので組織化しやすく、すぐに活動が軌道に乗りました。

活動するのは勤務時間外。自分にとって面白く、納得してできることを中心に、単純なボランティアではなく、「プロボノ・パブリコ」※4と呼ばれる専門知識・技術を活かした社会貢献を目指しています。私たちは専門分野も世代も勤務地も異なるため、何かの事業につながるような活動よりも、キャリアに関する幅広い情報提供などに強みがあると思っています。

大学では理系に進学して、専門職に就きたいと考えている高校生に、私たちの経験を紹介しているのもその一つ。女性技術士には文系から理転した人もいますから、アドバイスするというより、一人ひとりの経験から多様な進路があることを知ってもらえればと考えています。

秋山：中3から高2の女子生徒を対象にした「女子中高生夏の学校」（通称夏学）※5という宿泊研修型イベントに、科学研究者に交ざって参加しています。生徒さんには、様々な実験に参加してもらい、理系ならではの面白さを味わってもらいます。それとともに、親子でキャリアについて相談に来られるケースもありますから、ありのままの経験をお話しし、進路選択や将来のキャリアをイメージするのに役立ててもらっています。

※3「チーム・技魔女」宣言
・自分が楽しいと感じることを最優先する
・誰かの役に立てば嬉しい
・広く社会貢献できればなお素晴らしい
・世間で話題になったら自慢したい
※4　公共善のための専門知識・技術を活かした実践的社会貢献
※5　独立行政法人国立女性教育会館で開催される催しで、今年で13回目を数える。国立研究開発法人科学技術振興機構女子中高生の理系進路選択支援プログラム。「2泊3日の合宿研修期間中、女子中高生が科学研究者・技術者、大学生・大学院生等との交流を通じて、理系進路の魅力を知り、あるいは再確認し、理系に進もうという意思を高めることを目指す」。

性差について、適性について、ステレオタイプの考え方から脱却を。

秋山：ある時、塾や高校の進路指導において、女子に理系進学を敬遠させるようなことがあると聞いて驚いたことがあります。私自身は、「女性だから」「男性だから」と言われたことのないまま、国立大学の理系に進学しました。もともと男性の多い高校で、理系を選択した時には女性はさらに少なくなりましたが、決して進路指導によるものではなかったと思います。

女性が理系進学を敬遠する理由として、特定の科目に得意不得意があるからとも聞きます。私は大学ではCGを作るなど画像工学を学び、今は仕事でwebのシステム構築をしていますが、高校時代、数学が特に得意だったわけではありません。本をよく読んでいたこともあり、国語のほうが点数はよかったくらいです。ただ、頑張って考えると答えが一つに決まる理系科目のほうが性に合っていただけです。

千木良：たしかに女子生徒には、物理や数学は苦手で、生物は得意という人が多いかもしれませんし、それによって大学受験のための戦術を考えることには一理あるかもしれません。ただ、教育というものが、《今》ではなく次のステージを目的に行われるようでは問題です。それに興味や適性は、性差ではなく個人差によることのほうが大きいと私は考えています。

秋山：成績はいいけれど興味はないという教科より、点数は低いけれど面白いと思える教科の勉強が活かせる分野に進むのもいいと思います。点数が取れないからと切り捨てるのはよくありません。興味がある方が、将来、長く付き合っていけると思いますから。

千木良：反対に、特に興味がある分野ではなくても適性がある場合もある。それはそれで、それを突き詰めることで社会に大きく貢献できるかもしれません。その結果、仕事も楽しくなる。世の中の役に立っているという実感は仕事をしていく上でとても大事だからです。「成績に拘らず好きな分野に進みなさい」「興味よりも適性で選んでもよいよ」と薦めてくれる環境であってほしいと思います。

何事においてもそうですが、ステレオタイプに何でも決めてしまうことが問題だと思います。教科書のやり方とは違うけれど、どうしても自分の信じるやり方で突き詰めてみたいという人にはやらせてみてほしい。興味を持ってチャレンジすることが、イノベーションにつながるかもしれない。アインシュタインやエジソンも学校では落ちこぼれだったと聞いています。

しかし今、教育の現場にも、組織化された会社にも、異分子を受け入れる素地はほとんどありません。これは女性だけの問題ではないと思います。男性にも同じ思いをしている人はいるはず。他の人と同じことはしたくないという人は、性別に関係なく一定の割合でいますから。女性の問題に戻れば、男性が多い職場だから、育休、産休、親の介護で休むと目立ちますが、女性ばかりの社会、会社ならそれは当たり前で、男性が喫煙のために休憩すると異端扱いかもしれません。つまりどちらが正しい、価値があるということではない。マジョリティの声や、やり方が優先されるのは、組織運営の合理性からはやむをえないかもしれませんが、今、求められているイノベーションを生みだす環境からは最もかけ離れたものだと思います。

やりたいことを実現する方法はいくらでもある。情報を集め、決して諦めないこと——高校生へのメッセージ

千木良：かつて、指導者や保護者の情報不足が原因で、理系への適切な進路指導ができていないという経済産業省の調査結果を見たことがあります。女性が理系に進むのは大変といったイメージが大人の中で先行しているのでしょう。しかし今は、どの業種にも女性技術者の会はありますし、男女共同参画が謳われるようになってからは、多くの団体に男女共同参画運営委員会が置かれ、女性が委員長になって積極的に活動しています。また日立グループでは女性社員を支援する施策がたくさん打ち出されています。この手の情報は、きちんと調べればかなりあると思います【右ページコラムにて一部をご紹介】。ただし、求めていかないとなかなか辿り着かないのかもしれません。概して理系の人たちは、縁の下の力持ちのような働き方をしていて、表に出て「こんなことをしています」と声を大にすることは少ないですから。

秋山：理系の仕事をして、家庭を持ち、子どもを産んで普通に生活をしている女性はたくさんいるという事実があまり知られていないんでしょうね。「ここにいますよ！」って言いたいです（笑）。それも日立グループ内には、環境に恵まれているせいか結構います。ただ、「恵まれています」と声をあげる人は少ない。事実、不満の声のほうがあがりやすく、メディアでもそういった声がとりあげられやすい。

そもそも、仕事の大変さという点では理系も文系もない、と私は思っています。また、女性は理系に向かないなどとよく言われますが、それと同じくらい向かない男性もいます。私も男女の差は本質的ではないと思います。みんながそうしているから、「みんな同じことをしよう」っていうのは少し無理があるのでないでしょうか。

千木良：ダイバーシティーの対極ですね。

秋山：そういうマインドは、誰かが決めてくれるの

宇宙航空理工学科
2018年4月開設【定員80名】
「宇宙に憧れる」「航空機が好き」その思いを技術に変える。
宇宙航空産業の集積地で体験しながら学ぶ環境をそろえ、
モノづくり現場の未来をけん引する人を育成します。

電気電子システム工学科
電気システム工学科 ＋ 電子情報工学科
2018年4月開設【定員160名】
"スマートな社会"を実現する
"次世代製品"を生み出すため
企業の要請に応えて学びのカタチと環境を一新！
新しい発想や価値を創造できる
次世代の技術者を育成します。

都市建設工学科
2018年4月定員増【定員80名】
まちづくりのプロフェッショナルに
ふさわしい知識・技術を修得します。

中部大学
〒487-850愛知県春日井市松本町1200
0120-873941 中部大学入学センター
文理融合7学部がワンキャンパスに集結する総合大学
■工学部　機械工学科／電気システム工学科*1／都市建設工学科／建築学科／応用化学科／情報工学科／ロボット理工学科／宇宙航空理工学科*2
■経営情報学部　経営総合学科　■国際関係学部　国際学科　■人文学部　日本語日本文化学科／英語英米文化学科／コミュニケーション学科／心理学科／歴史地理学科　■応用生物学部　応用生物化学科／環境生物科学科／食品栄養科学科（食品栄養科学専攻、管理栄養科学専攻）
■生命健康科学部　生命医科学科／保健看護学科／理学療法学科／作業療法学科／臨床工学科／スポーツ保健医療学科
■現代教育学部　幼児教育学科／現代教育学科（現代教育専攻、中等教育国語数学専攻）
*1 2017年4月、既存の学科を統合し、開設　*2 2018年4月、開設
中部大学の最新情報はホームページへアクセス！
中部大学 検索
https://www.chubu.ac.jp

を待つことにつながり、よく言われる指示待ち人間、ちょっとしたことにも踏み出せない人を作っていくなのではないか。みんながイノベーション目指して血眼になる必要はないと思いますが、みんなが待ちの姿勢になっては困ります。

千木良：そもそも中高生の周りに、「女性はこういう仕事に向いていない」と思わせる環境があること自体が問題です。といって女性はみな社会に出て働くべきとも思っていません。女性にも向き不向きがありますから、結婚して家庭で子どもを育てることに向いている人もいるでしょうし、子どもを産まない選択をして働き続ける人もいるでしょう。やりたいことがやれない、自由を奪われるような環境はなくしてほしいと切に思います。「チーム・技魔女」はそういう環境を打破しようとする人の側に立ちたいと思っています。

やりたいことに立ちはだかる障害を解決する手段はいくらでもあると思います。思う存分働きたいからとハウスキーパーさんを頼む、というのは良い事例です。身近に良い手段を見つけられなければ、自らそれを提供する環境を作る側に回って新事業を立ち上げるという解決手段もあります。

「親に反対されるから」「難しそうだから」「友達とは違う道だから」と尻込みしないことです。そのためには、保護者や先生には、子どもたちが中学や高校のうちから選択肢を狭めないよう、普（あまね）く、偏りのない情報を提供してあげてほしいと思います。加えて、学生時代にもっと勉強しておけばよかったと考えている社会人は実に多いですから、どうすれば、子どもたちが自ら、いろいろな分野の勉強をしたいと思うようになるかを考えてほしいですね。

秋山：私も、学生時代もっと勉強しておけばよかったと後悔している一人です。今は新しいことを、当時よりずっと真剣に勉強しています。もし今、大学に入り直せるなら人工知能とか機械学習について学んでみたいですね。

工学系女性ネットワーク

(一社)土木技術者女性の会　http://www.womencivilengineers.com/
女性建築技術者の会　http://www.h5.dion.ne.jp/~jogikai/#
SJWS:(一社)日本女性科学者の会　http://sjws.info/
JNWES:定非営利活動法人日本女性技術者科学者ネットワーク　http://www.jnwes.org/
公益社団法人自動車技術会 女性技術者交流会　https://jsae.or.jp/woman/ikou_index.html
内閣府男女共同参画府「理工チャレンジ」(リコチャレ)　http://www.gender.go.jp/c-challenge/
講談社「Rikejo」　http://www.rikejo.jp/
国立研究開発法人科学技術振興機構「科学の甲子園」　http://koushien.jst.go.jp/koushien/
男女共同参画学協会連絡会　http://www.djrenrakukai.org/
内閣府男女共同参画府「はばたく女性人材バンク」　http://www.gender.go.jp/policy/yakuin/index.html
独立行政法人国立女性教育会館「女性中高生夏の学校」　https://www.nwec.jp/event/training/g_natsugaku2017.html
(一社)建築設備技術者協会 設備女子会　http://www.jabmee.or.jp/jyosikai/index.php
(一社)日本建設業連合会 けんせつ小町　http://nikkenren.com/komachi/index.html
INWES:国際女性技術者科学者ネットワーク　http://www.inwes.org/
日本機械学会 LAJ委員会(メカジョ)　https://www.jsme.or.jp/laj/index.html
全国女性造園技術者の会(Green-Web)　http://www.green-web1990.com/

古典籍へのアクセスが飛躍的に向上。人工知能（AI）を使った くずし字の解読も始まり、古典の学びがより身近に

国文学研究資料館（以下、国文研）※1が日本古典籍に関するポータルサイト「新日本古典籍総合データベース」を正式公開。人文学オープンデータ共同利用センター（CODH:Center for Open Data in the Humanities）※2と協力して字形データの公開も。

去る10月27日、国文研は、奈良時代から1868年までに制作された日本語の歴史典籍、いわゆる古典籍全冊の画像を撮影し、データベース化した「新日本古典籍総合データベース」の公開を始めた。文部科学省による大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（歴史的典籍NW事業）」の一環で、2014年から10年かけて30万点の画像化を目指す。この日から公開されるのは、すでに撮影し書誌との照合を終えた約7万4千点、画像数で約1千万コマと約60万点の書誌で、うち2万2千コマには検索に便利なようにタグが付けられている。公開の意義、それによって高まる利用者の利便性、また事業の将来展望について、山本和明先生にお聞きした。

※1　2004年設立の大学共同利用機関法人人間文化研究機構を構成する6機関のうちの1つ。また教育組織としては国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻が設置されている。
※2　大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設に2017年4月に開設された機関。デジタル・ヒューマニティーズ（人文情報学）の方法論を取り入れて、データ駆動型の人文学研究や超学際的な人文学研究の普及に務める専門機関。

国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
副センター長
山本　和明 先生

国内に所蔵される主要古典籍の検索が一括で容易に

公開にあたっては、

①誰でも（登録なしで）、無料で、いつ・どこでも自由に利用できること、
②クリエイティブ・コモンズ表示などで、論文への引用など、利用の手続きの明確化と簡素化、
③電子データに付与される国際的識別子DOI(デジタルオブジェクト識別子)を採用し、リンク切れなどがなく、いつ見ても確認可能であること、
④もっとも先端的なIIIF（トリプルアイエフ）ビューワーを採用し、大容量の画像でもすぐに確認できる。つまり見る人にとってストレスフリーであること、

の4点を重視しました。そして《秘蔵は死蔵》をモットーに、シチズンサイエンス(市民科学)の時代にも対応したいと考えました。

正式公開にあわせて、国立情報学研究所（NII: National Institute of Informatics　東京都千代田区）※3が運用するCiNii Books（日本国内の図書館などが所蔵する本(図書や雑誌)の情報検索サービス）との連携も始め、その利用者は、検索結果画面から「新日本古典籍総合データベース」に直接アクセスして閲覧できるようになりました。NIIはすでに、国立国会図書館デジタルコレクションとも同様の連携を行っていますが、海外からのアクセスも多いCiNii Booksとも連携することで、市民だけでなく海外の研究者による古典籍へのアクセスは飛躍的に向上することになると思います。

※3　大学共同利用機関法人情報・システム研究機構（ROIS：Research Organization of Infoemation and Systems）を構成する大学共同利用機関の一つ。

くずし字解読のために、大量の字形データも公開

国文研が古典籍の画像化とともに進めてきたのが、その本文画像をOCRで読み込ませるなどして、半自動的にテキストデータを生成する実験です。

そもそも日本の古典籍は、明治期に普及した活字体によるものと異なり、版木を使った版本など、その多くはくずし字や変体仮名によって書かれています。そのため活字文化で育った世代にはほとんど判読できないのです。研究のすそ野を広げるにはテキスト化が欠かせません。ただそのためには専門家による解読に頼るしかありませんから、その数は限られ、現在テキスト化されている古典籍は全体の1%程度に過ぎないとも言われています。このままもし多くの古典籍が解読されないままでいるようなら、それは日本文化にとっては大きな損失です※4。

ところでくずし字は、連綿体と言われるように、文字と文字とがつながっていますから、OCRで読み込むには、一文字一文字に分解し、座標軸の中で範囲を指定していく必要があります。その際、中間生成物として大量に派生するのが、座標データを伴ったくずし字の字形データ。これを作品毎にデータセットとしてダウンロードできるようにしたのが「日本古典籍字形データセット」で、現在、3,999文字種、403,242文字のデータをCODHの協力のもと公開しています※5。

公開のきっかけになったのは、字形データを見た情報学系の研究者からの、「画像処理の材料に使ってみたい」「大量にコンピュータに取り込み学習させておけばいずれ人工知能（AI）で解読できるのではないか」などの声でした。こうした声を受け国文研では、自分たちで公開しても、おそらくだれも利用してくれないだろうと判断し、情報系のCODHと協力して公開することに踏み切ったのです。その結果、理系や情報学系の研究者がこれを自由に使うようになり、すでに様々な解読方法が試みられるようになりました。この中からはいずれ、われわれの思いもしないアルゴリズム（手順）が生まれるのではないかと期待しています。

※4　このほか、旧字体から新字体へ、旧漢字から新漢字への移行。そして今のデジタル化なども、貴重な資料が埋もれていくきっかけとなると懸念されている。
※5　CODHでは他に、国文学研究資料館所蔵本を中心にした古典籍画像のデータセット、「日本古典籍データセット」では701点の画像データをダウンロード可能な形式で提供している。（2017年11月現在）

文理融合で、古典籍を用いた研究に新たな風を

このような取組の中から、くずし字を画像処理で解読し、版本をテキスト化する方法が見つかれば、30万点の画像公開に劣らない大きな成果になると考えられます。当然、現代語訳、さらには外国語への翻訳も加速するでしょう。古典籍には文学作品だけではなく、日本文化や自然科学に関するもの含まれますから、これまで知られなかった、あるいはくずし字で書かれているために手をだせなかったものが古典籍の専門家以外、あるいは海外の研究者の目にも触れやすくなり、新たな文化資産として脚光を浴びるようになるかもしれません。

私たち国文学研究者にしてみれば、デジタル時代になって、これまで以上に古典籍に注目が集まるというのは皮肉な現象にも感じられますが、同時にとても喜ばしいことでもあります。デジタルテクノロジーから最も縁遠いと考えられる国文学研究ですが、今後は、大量のデジタルデータを駆使するなどの新しい方法、学問の形が出てこないとも限りませんし、さらには理系・文系双方のリテラシーを備えた新しいタイプの研究者が生まれてくることも考えられます。また高校をはじめ、学校での古典や伝統文化の学びが、一連のデジタル化の進展によって、一層豊かなものになるのではないかとも期待しています。

芸術計画学科 2018年4月リニューアル！
小さくまとまるな。常識にとらわれるな。
めざすなら、何十億を動かすプロデューサー、世界を変えるプロデューサーだ。
アートプロデュース／イベントプロデュース　芸術計画学科

全天周投影の実験ドーム、4K・8K（計画中）、VR、水中撮影、空撮（ドローン）（計画中）…。ここでしか追求できない、映像表現の新たな可能性に挑め。
2017年4月 始動！
ファインアート／プロフェッショナル／映像表現　写真学科

白浜での水中撮影授業

空撮（ドローン）授業

2016年に開催された大阪市中央公会堂・プロジェクションマッピング

作品名robovie-mR2　RoboviaはATRの登録商品です。

文系理系、関係ない。世界を驚かせるのは、キミだ。
2017年4月 開設！
アートエンターテインメント／先端デザイン　アートサイエンス学科

学科　アートサイエンス　美術 コース：油画／日本画／版画／彫刻　デザイン コース：グラフィックデザイン／イラストレーション／デジタルメディア／デジタルアーツ／プロダクトデザイン／空間デザイン／デザインプロデュース　工芸 コース：金属工芸／陶芸／ガラス工芸／テキスタイル・染織　写真　建築　映像　キャラクター造形 コース：漫画／アニメーション／ゲーム／フィギュアアーツ　文芸　放送 コース：制作／アナウンス／広告／声優　芸術計画　舞台芸術 コース：演技演出／ミュージカル／舞踊／ボビュラーダンス／舞台美術／舞台音響効果／舞台照明　音楽 コース：音楽・音響デザイン／音楽教育　演奏 コース：ピアノ／声楽／管弦打／ポピュラー音楽　初等芸術教育 コース：初等教育／芸術療法

大阪芸術大学
〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山469 TEL:0721-93-3781(代表)　大阪芸術大学　検索

大学の学びの積み重ねが、就業力を高める

法政大学キャリアセンターでは、2016年度に延べ20,500件の個別相談に対応。キャリア教育から就職支援までのシームレスな取組で《自由を生き抜く実践知》☆を養う。

2017年度も学生の売り手市場で終わった就職戦線。その中での各大学の就職支援は。今春の入試で志願者数を大きく伸ばし、出口である就職実績でも躍進が見られる法政大学※1。「大規模大学でありながら、きめ細かな就職支援で、一人ひとりの学生が希望する企業へ就職できるよう、就職率100%を目指す」というキャリアセンター長の竹内淑恵先生と、事務部長の藤野吉成さんに、その取組、改革についてお聞きしました。

※1　2017年3月卒業生における実就職率（就職決定者を全卒業生の進学者を除いた数で割った割合）は、MARCH（明治・青山学院・立教・中央・法政）の中で1位の90.3%（大学通信調べ）。進路指導教諭が選ぶ「就職に力を入れている大学」ランキングでも全国3位である（大学通信調べ）。法政大学が2017年卒業生に、キャンパスで行った企業説明会には1000社が参加、主要行事の参加学生はのべ10万人を超えたという。
☆従来の「自由と進歩」の学風を「自由を生き抜く実践知」と表現し、2016年4月に田中優子総長のもと制定された「法政大学憲章」。

法政大学キャリアセンター長
（経営学部教授）
竹内　淑恵 先生

Profile
お茶の水女子大学卒業。筑波大学大学院経営・政策科学研究科企業科学専攻修了。博士（経営学）。ライオン株式会社マーケティング本部などの勤務を経て、2003年から法政大学経営学部教授。専門はマーケティング論、広告コミュニケーション論。

キャリアセンター事務部長
藤野　吉成 さん

≪就職に強い法政≫であり続けるために

藤野：2017年度の各大学の就職実績は堅調で、本学も昨年度を上回る実績をあげられたと満足しています。ただ、全体の求人倍率も昨年より高いとの分析もある反面、従業員が5,000名以上の大企業では、求人倍率は前年の0.59倍から0.39倍（リクルートワークス調べ）へと下がっています。各社とも激化するグローバル競争に対応すべく経営の効率化を進めていて、新卒採用に対する考え方も変化しているようです。大企業に学生の希望が集中しやすいという現在の就活生の志向の問題もあり、大企業を目指そうと考えている学生にはしっかりとした準備が必要です。反対に、知名度こそ劣るものの、業績で引けを取らない優良企業で、採用意欲の高い企業を我々は良くお見掛けしますので、そうした企業の魅力について学生に発信していく必要性を感じています。

本学のような毎年卒業生が6,000人を超える大規模な総合大学にとっては、きめ細かな就職指導として個別相談においてどれだけの学生に対応できるかが、就職率を高める鍵になると言っても過言ではありません。2016年度に当センターがこなした相談件数は大学院生も含め、20,500件にものぼります。2017年度は相談を担当する職員の業務効率向上に取り組み、待ち時間を40%短縮したことで、件数を50%引き上げることができました。

来年度へ向けては、繁忙期となる11月から3月にかけて職員の増員を検討するとともに、この11月からは10～20名単位のワーク型の講座をスタートさせます。就職活動が本格化する春の段階でも、「就活とは」「何のために仕事をするのか」「自分の適性や強みは何か」などから指導を始めなければならないケースもありますから、エントリーシートの書き方、業界・企業研究、自己分析などについての指導は早めに済ませ、採用試験開始時期での個別相談対応の効率を高めたいからです。もちろん個別相談に来られない学生の便宜を図る目的もあります。

竹内：正課教育については、これまで教育開発支援機構という組織のもとで行っていた1年次の教養課目、《キャリアとは》《大学の学びとは》について学ぶ『キャリア教育プログラム』を、来年度から本センターに移管し、より一層の充実を図ります。キャリア教育の本来の目的は、採用状況と関係なく、学生が卒業後、社会の中で力強く生き抜いていくために必要な力を身につけてもらうことですから、キャリアや就業についての教育、インターンシップ（※2）、就職支援について、その入口から出口までをシームレスに、教員と職員が一丸となって担って行くのがキャリアセンターのあるべき姿だと考えています。

※2　法政大学経営学部は、単位認定されるインターンシップを1996年にスタート。これは私立大学としては最も早いとされている。以来キャリアセンターでも、就職のためだけでなく、就業力を高めるという意味で重視してきたという。2017年に就職活動中の全学生に対するアンケートでは、1日のものも含め60%が何らかのインターンシップに参加。そのうち70%が参加企業にエントリー、うち46.1%が内定を獲得しているという。

グローバル化や保護者への対応など、欠かせない全方位型の取組

藤野：就職支援の充実には、卒業生の協力も欠かせません。幸い本学は、長い歴史に加えて卒業生組織がよくまとまっていますから、学生が各企業の卒業生を訪ねていきやすく、卒業生も学生の訪問を快く受け入れてくれています。また、法政BPC（ビジネス・パーソンズ・コミュニティ）を2012年に発足。組織的・持続的に学生のキャリア形成を支援するのを目的に、キャリアセンターとOB・OGの代表が事務局となり、各業界から参画する加盟企業90社の若手・中堅卒業生の有志とともに、学生に現役社会人との交流の場を提供しています。現在約200名がボランティアで活動していて、互いの交流を図っています。

それとは別に、就職内定の決まった現役学生によるサポーター組織もあります。市ヶ谷・多摩キャンパスでは毎年、約40名が一年下の学生の相談に乗っています。こうした活動は学生が学生を支援するピア・サポート活動※3の一環として、全学的に推進している「法政大学ピア・ネット」の一端を担っています。

竹内：先輩として後輩に自分の体験を伝える、翌年、その恩恵を受けた学生が後輩に返していくという好循環ができています。

藤野：メンバー同志の交流も深まり、卒業後は法政BPCとも連携してその輪を広げていくことを期待しています。キャリアセンターとしては、法政BPCも含めてより強固で大きな組織に成長する仕組みを現在、考えています。

竹内：グローバル化への対応は、私も委員として加わっているグローバル教育センターが担当していますが、『海外インターンシップ』に加えて『海外ボランティア』も単位認定されるようになりました。

藤野：近年は少子化が進み、保護者の就活への関心も高まっている上、企業の採用活動解禁も揺れ動いていますから、保護者への説明は欠かせません。当センターでは、入学式当日に新入生保護者向けキャリアガイダンスを開催。本学の就職支援制度、公務員・法職講座、会計専門職講座についての3部構成で大学の就職に対する手厚いサポートに理解いただくように努めています。この他、毎年夏には全都道府県で『父母懇談会』を行っています。特に近年は、産業構造の変化やビジネスの多様化によって、保護者の時代と今の就職環境とは大きく異なることの理解やUターン就職に力点を置いています。

※3　他にはボランティア活動や授業支援アシスタントなどさまざま。

大学の学びの積み重ねが、自由な時代を生き抜く実践知となる

竹内：大学や学部により多少違いはありますが、日本の大学では一般教養課目、専門入門科目、専門科目へと学年が上がるにつれ専門性を深めるような構造になっています。私はそれぞれの授業で学ぶことが、就職活動で求められる力にもなると考えています。自ら進んで情報を収集・分析したり、レポートの形で文章化したりすることは、エントリーシートを書いたり、企業研究における情報収集作業に通じますし、これらを4年間で繰り返し積み重ね、深めていくことで就業力、つまり文章作成能力、情報の収集・分析力、発信力、状況を判断して行動する力などが身についていきます。就職活動の時期が来たからと、これらを一朝一夕に身につけようとしても簡単ではありませんから、われわれの組織だけでなく、学生の学びもシームレスでなければなりませんし、何よりもそういう意識を持つことが大切だと思います。それができれば、卒業時には《自由を生き抜く実践知》を身につけてもらうことができると思っています。

一方で大学も、たとえ大教室の授業だとしても、従来の一方通行のものでなく、学生の参加を促すアクティブラーニング、課題解決型授業などに変えていくなど、教育改革のスピードを上げていかなければなりません。

藤野：デジタルテクノロジーの急激な進展で、将来は今ある仕事の半分が無くなるとも言われ、何事においても自ら切り拓いていく力が求められる今の学生にとって、大学4年間をどのように過ごすかはとても大事です。そこがしっかりできれば、本来の大学の学びを獲得でき、キャリアセンターの支援と相まって、希望する企業への内定を得ることができると思っています。

受験生の皆さんが十分に力を発揮できる
入試制度を用意しています

T日程入試（統一日程）
全学部が得意な2科目で受験可能
文系で最大11学部、理系で3学部の併願可能

英語外部試験利用入試
基準を満たせば英語試験免除、1科目で受験可能
T日程入試との併願可能

A方式入試（個別日程）
主に3科目で受験、試験日が異なれば併願可能
一般入試の中で最も募集人数が多い

大学入試センター試験利用入試
教科数の少ない私立大学型B方式（3教科型）
国立大学と併願しやすいC方式（5教科6科目型）

お問い合せ　法政大学入学センター
法政大学 HOSEI University
〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL 03-3264-9300（直通）
PC http://nyushi.hosei.ac.jp/
法政 入試 検索

デキル!学科　静岡産業大学スポーツ人間科学部（仮称、設置構想中）

スポーツを「する」から「はかる」「考える」へ

新しいスポーツ教育（モデル）を静岡から発信。新しいスポーツ文化の拠点を

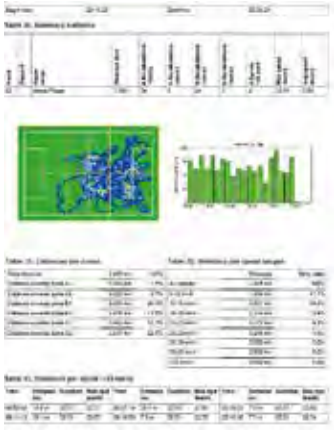
人気プロサッカーチーム、ジュビロ磐田の本拠地、静岡県磐田市。JR磐田駅から南には、遠州灘に続く広大な平坦地が続く。その中心となる大池周辺は、市がスポーツエリアとして、天然芝のサッカーグランドをはじめ様々な競技施設を計画、急ピッチで今、その整備が進められている。その中核に位置づけられているのが静岡産業大学磐田キャンパス。現在、経営学部が置かれているが、2019年度には、その中のスポーツ経営学科を改組拡大し、静岡県初となるスポーツに特化した学部、スポーツ人間科学部（仮称）の開設が構想されている。キャッチフレーズは《スポーツを、解放しよう》。開設の狙いや目的、その背景、および教育・研究の特徴、目指すところなどについて、学部長予定者である経営学部教授の小澤治夫先生と同准教授の館俊樹先生の話を交えてご紹介する。

静岡産業大学経営学部
教授 **小澤　治夫** 先生

Profile
東京教育大学（現筑波大学）大学院体育学研究科修了。医学博士・体育学修士。筑波大学付属駒場中高校教諭（1978～2003）北海道教育大学教育学部教授（2003～2007）東海大学体育学部体育学科教授（2007～2015）東海大学大学院体育学研究科長（2010～2014）東海大学スポーツ医科学研究所教授（2015～2017）2008年～2013年埼玉県スポーツ推進審議会会長。静岡高等学校出身。

同　准教授
館　俊樹 先生

Profile
早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程。人間科学修士。静岡県総合健康センター研究員。日本体育学会、東海体育学会、日本発育・発達学会所属。明治学院高等学校出身。



今なぜスポーツ人間科学か?

《スポーツを、解放しよう》のキャッチフレーズに見られるように、新学部が目指すのは、狭義のスポーツ観ではなく、楽しむこと、考えることを前面に打ち出した本来のスポーツ観に基づいた教育・研究の具体化とスポーツの推進です。

日本では往々にして、スポーツは楽しむことではなく、勝つこと、あるいは修行やしつけが目的とされ、子どもたちのスポーツに対する満足度も、ヨーロッパなどに比べて低いとされてきました※。また大学や社会人スポーツでは競技を最優先する仕組みが出来上がっていて、多くのスポーツパーソンが18歳と22歳でドロップアウトしていますし、オーバーユース、燃え尽き症候群なども深刻な問題です。新学部が《解放》という言葉に託したのは、これらを生んだ指導法やスポーツ教育の元にある現在の日本のスポーツ観、スポーツ文化からの脱却です。

若手教員を代表して館俊樹先生は、「優れた選手を育てることも大事だが、それはあくまでも結果。成熟社会を迎えた日本では、多くの人にスポーツを楽しんでもらうことが大事で、そのためには、競技力の向上だけでなく、コミュニティーつくり、レジャー、健康つくり等、多様なニーズに応えられる高度なスポーツ人材の育成が急務。また少年期、青年期における結果だけでなく、老年期に入ってもスポーツを続けられることを視野に入れた指導者の育成も重要」としたうえで、いずれの場合も人を中心に置くことが最優先にされるべきという意味から、学部名には《人間》を入れたかったと語ってくれました。

新学部開設の背景と経緯

現在、日本では、2020年へ向けてだけでなく、超高齢化社会や生涯スポーツ時代へ向けて、これまでになくスポーツへの関心が高まっています。そのため高度なスポーツ人材は、教員やスポーツ指導者に限らず、スポーツビジネス、行政のスポーツ振興など、活躍の場は広がると予想されています。またスポーツを続けてきた学生に対する企業の評価は相変わらず高く、スポーツ教育を受けてきた学生の受け入れ先は、今後も増えていくと考えられます。

また子どもの教育の観点からは、遊び場が減る中、部活指導も含め、学校体育の役割がますます重要になってくるだけでなく、地域で大人と子どもが一緒にスポーツを楽しめる環境を提供するという意味から、最新鋭機器を備えている大学には、地域のスポーツの中核を担う役割も期待されています。

新学部開設のもう一つの背景は、磐田が、ジュビロ磐田の本拠地という地の利。すでに経営学部スポーツ経営学科では、ジュビロ磐田と連携して、アスリートやスポーツ現場の指導者だけでなく、スポーツビジネスや地域貢献を目指す人材育成にも取り組んでいます。

※東海大学国際文化学部の中西健一郎准教授による「寒冷地域における青少年のサッカー振興に関する国際比較についての基礎的研究―札幌地区とデンマークとの比較検討」では、「練習や試合に満足している」子供の割合が、デンマークの約96%に対し札幌は7%、「どちらかというと満足」まで入れるとほぼ100%対10%になっている。

《スポーツをはかる》を、新しいスポーツ教育、研究のモデルに

スポーツ経営学科ではこれまで10年近く、館先生を中心に若手研究者によってデジタルテクノロジーをスポーツの様々な場面で活用する研究が続けられてきました。その一つが《スポーツをはかる》取組。GPSを使って、センサーをつけたプレーヤーの運動量やスピードを計測するのもその一つで、これはサッカーなどの競技の分析だけでなく【上図】、幼児や児童・生徒の指導にも活用できると期待されています。最近模擬的に行った小学生を対象にした鬼ごっこの実験では、ルールを少し変えることで、それまで動きの悪かった子の動きがよくなることなどがわかりました。

子どもの学校外での運動を増やすには、学校の体育の授業の活用が重要と言われていますが、運動能力の幅が大きい学校体育の現場では、運動が得意な子どもが運動量を増やし、苦手な子どもの運動量は少ないとの懸念もあります。そこでこうした研究をさらに深め、一つのクラスで、一定期間に全員が積極的に参加できるようなルールを考案できれば、これまでより多くの子どもたちが参加する喜びを味わい、自分にもできるという自己肯定感を感じ、さらにはリーダーシップを育むこともできるかもしれません。

スポーツ施設は充実しているものの、欧米に比べテクノロジーの導入では遅れをとっている日本。新学部には、このようにスポーツの概念を変えていくことにつながる研究をはじめ、その牽引役としての期待が集まります。

高校生へのメッセージ
――18歳から始める?《文武両道》

デジタルテクノロジーを使って、「スポーツを観る」「体を診る」「動きを視る」ための新しい手法の開発に力を入れようという新学部ですが、すべてをそれに任せきるという意味ではないと語るのは、体育教育に長年携わり、国や自治体の各種委員会にも関わりをもつ小澤治夫先生。大学で学ぶにあたって大事なのは、その知見を自分の頭で理解し、《からだ観》や《運動観》、つまり「自分の体とは何か」「それをどう作っていくか」などについての自分の考え、いわば哲学を確立することだと考える小澤先生は、「そこまで行きつかないと、いくらスポーツのパフォーマンスを上げても、大学で4年間学ぶ意味はない。体と同時に頭を鍛えるという意味での文武両道を目指してほしい」と、新学部を目指す生徒にメッセージを送ってくれました。

スポーツが好きだからと入学してくる学生の中には、中学・高校での勉強が足りていない者もいるといいます。しかしそんな彼らも、自分の好きなスポーツをきっかけに、大学の4年間でスポーツについて考え、それを科学する中で、どんどん伸びていく。館先生の言い方を借りれば、「《武》を媒体として《文》の世界に入っていく」のです。「18歳のポテンシャルを信じそれを開花させたいから、面倒見の良さではどこにも負けたくない」（小澤先生）と、《武》から入ってきた学生を、4年間で《文》にも強い若者にして社会へ送り出す。そんな新しい大学教育モデルに挑戦し、それを全国に発信していくというスポーツ人間科学部に注目したいと思います。

人間スポーツ学科（仮称）

1. スポーツ分野を幅広く。マネジメントの領域。アートと一体化したスポーツ。スポーツを通し、人間が主役の活き活きとした社会創出を主導的に担う人材を養成します。
2. 自己実現の大切さと、それを享受できる能力を培います。知育とスポーツの均衡のとれた教授法、スポーツの情報化やその分析方法、スポーツビジネスの経営手法等を習得します。
3. 想定される卒業後の進路／保健体育教員（中学・高校）、障がい者スポーツ指導員、日本体育協会公認指導員、スポーツイベントプロデューサー、スポーツ映像デザイナー等

こども教育学科（仮称）

1. 幼児期におけるスポーツ指導がもたらす健全な心身の発達や、人間形成の重要性を認識した幼児教育・保育を実践できる人材を養成します。
2. 幼児段階での成長と人間性形成を促し、支援する方法の能力を培います。こどものこころと身体の成長をもたらす教授法やそのプロセスでのサポート方法を習得します。
3. 想定される卒業後の進路／幼稚園教員、保育士、特別支援学校教諭、障がい者スポーツ指導員、日本体育協会公認指導員、障がい児支援施設職員等

※ただし、文部科学省における審査の結果、予定している教職課程等の開設時期が変更となる可能性があります。

2020年度以降の国立大学入試、5教科7科目を継続

国立大学協会は2020年度以降の国立大学入試について、一般選抜の第1次試験として原則として5教科7科目を課す方針を明らかにした。個別試験では当面、試験日程を前期、後期に分けて実施する現行方式を継続、学力試験以外の要素も加味した総合型選抜や学校推薦型選抜の取り組みを加速するとしている。

国立大学協会によると、共通試験と個別試験の組み合わせは多面的、総合的に受験生の学力を評価するうえで必要とし、今後も堅持する。このため、2020年度以降の大学入学共通テスト導入後も5教科7科目の受験を共通試験で課す。

英語では民間の認定試験活用を進め、一般選抜の全受験生に課すとともに、2023年度までは大学入学共通テストで実施される英語試験も併せて受けてもらうことにした。国語、数学では大学入学共通テストの記述式問題を全受験生必須とする。

個別試験では、思考力や判断力などを問う高度な記述式問題を実施、その内容について各大学が募集要項で出題意図や求められる能力を明確にする。

国立大学協会会長の山極壽一京都大学総長は「英語の認定試験では受験生の経済的負担軽減や受験機会の公平性担保、共通試験の記述式問題では採点の質確保、段階別成績表示の具体的方法など課題も残るが、文部科学省は速やかに課題解決を進めてほしい」との談話を公表した。

工学院大学が先進工学部に航空･宇宙分野を新設、2019年度から

工学院大学（東京新宿区）は2017年12月14日、新宿キャンパスで記者発表会を行い、2019年度より先進工学部に新たに航空理工学専攻と宇宙物理学専攻を設置することを発表した。工学の知識をベースに航空・宇宙分野で活躍できる人材育成を目指す。

機械理工学科に新設される航空理工学専攻は、パイロット資格取得を視野に入れた実務的なコース。私立大学で唯一、固定翼・回転翼の両翼から選択可能で、12の資格が取得できる。高度な工学を学びながら日米で飛行訓練を経験するカリキュラムを通じて、海外でも活躍できるグローバルな「エンジニア・パイロット(Engineer Pilot)」を養成する。また、これまで大きなハードルとなっていた訓練費用を「ハイブリッド留学®(※1)」プログラムを活用することで大幅に抑制している点も特長だ。

宇宙物理学専攻は、宇宙科学とその関連産業の発展に貢献できる人材を育成するコースで、応用物理学科に設置される。宇宙･惑星科学、宇宙の起源、ブラックホール、ニュートリノなど宇宙に関わる学びの分野を幅広く網羅しており、大学院への進学、宇宙科学と関連産業分野への就職など多様な活躍ができる理工系人材の育成を目指す。

※1：2013年に工学院大学が開発した、日本初の留学プログラム。工学院大学の教員が赴き日本語で授業を行うため渡航先での授業料は不要。ホームステイと現地で開講される英語教育で語学力を向上させながら、休学することなく4年間で専門性を獲得することができる。

実践女子大学学園祭で、ゼミ活動で支援する子どもと「なかよしカフェ」オープン

実践女子大学は、2017年11月11日に開催する「常磐祭（学園祭）」で、発達の遅れがあるS君（5歳）がカフェ店員として店頭に立つ「なかよしカフェ」を実施する。これは、生活科学部生活文化学科の長崎勤教授が研究代表者を務める「希釈飲料作成（カルピス®つくり）による発達障害児の他者意図理解・協同活動アセスメントと支援方法の開発」（文部科学省科学研究費補助金基盤研究C）の一環として行われる。

カルピス®つくりを通して、“自分につくる”、“誰かのためにつくる”、“相手の好みに合わせて濃さを調整する”など、子どもに大切なコミュニケーション発達を促すこの活動は、2015年度にカルピス株式会社との共同研究としてスタートしたもの。

長崎教授の研究室では2015年度からゼミ活動の一環としてS君の発達の支援を行っている。月に2回、日野キャンパス内のプレイルームで、言語面、認知面、運動面などの発達支援を行うほか、保護者へのカウンセリングや保育園との情報共有を行い、S君の能力を最大限に発揮させるための包括的発達支援に取り組んでいる。その中でS君は、サーキットトレーニング、ゲームや劇遊びを通した言語指導などと合わせて、コミュニケーション発達を促すため、カルピス®つくりにも継続的に取り組んできた。

こうした活動の一環として、常磐祭当日、長崎ゼミの学生17名がこれまでの取り組みを紹介しつつ、先着500名に無料でカルピス®をふるまう「なかよしカフェ」を出店する。この「なかよしカフェ」では、約40分間、S君がカフェ店員となってお客様にカルピス®をつくり提供することに挑戦する。

常磐祭でS君がカルピス®つくりを行うことにあたり、長崎ゼミの学生たちには、普段と違う環境の中でS君自身の力を最大限に引き出したい、そして、地域住民が多数訪れる学園祭の場で、多くの人がS君の存在を知り、S君を一人の人間として自然に受け入れてほしいという強い思いがある。

金城学院大学が名古屋市営地下鉄60周年記念の車両デザインに協力

金城学院大学（愛知県名古屋市）環境デザイン学科の学生が名古屋市営地下鉄の開業60周年を記念して、東山線車両の車内装飾づくりに協力した。特別デザインの座席と吊り手の取り付けは、名古屋市営地下鉄で初めての試みとなった。装飾が施された特別列車は2017年11月6日から運行を開始している。

金城学院大学と名古屋市交通局が「学生力を活かした市バス・地下鉄魅力創造プロジェクト」を開始したのは、1年前となる2016年8月。学生の柔軟な発想力と情報力を活用して新たな市バス・地下鉄の魅力を作り出し、利用促進とまちの活性化に貢献することが目的だ。

その後、金城学院大学では環境デザインを学ぶ学生22名で「金城学院大学環境デザイン特別プロジェクトチーム2016」を発足。環境デザイン学の観点と女性の視点を活かし、駅や車内空間の魅力づくりに関する研究に取り組んできた。

特別列車の吊り手は、地下鉄ラインカラーのカラフルな持ち手に染色。ベルトは白で統一し、車内が明るく楽しくなるようにデザインされている。座席は、地下鉄開業60周年のロゴマークをアレンジし、また、着座位置をわかりやすくすることでマナーアップにつながる工夫がなされている。この吊り手と座席は、東山線全48編成のうちの1編成（N1000形車両）高畑側の先頭車両1両目に実装され、2018年3月中旬まで営業運行する。

佐賀大学推薦入試で全国初のタブレット使用　即時採点、間違えても類題で「学習する力」試す

佐賀大学の2018年度推薦入試でタブレットを使って出題、解答する全国初のCBT入試が行われた。大学入試改革で次期学習指導要領が適用される2024年度以降の課題とされたCBT方式の試験を先取りした格好だ。

対象となった学科と試験は、大学入試センター試験を課さない「推薦入試Ⅰ」のうち、理工学部の知能情報システム学科、機能物質化学科、機械システム工学科、電気電子工学科、都市工学科と、農学部の応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科。約60人が入試に挑んだ。

受験生は配られたタブレットに受験番号と生年月日を入力し、動作を確認したあと、60分の試験時間で数学、英語、化学、物理、生物の5教科から出題される複数の問題に取り組んだ。解答は自動で採点され、採点内容は面接に活かされる。間違えた解答があった受験生には問題の解説と「学習する力」を試す類似問題がさらに出題された。

佐賀大学は受験生の正確な学力を計るため、佐賀県内のシステム開発会社

と共同でCBT方式のプログラム開発を進めていた。最初に入力するパスコードにより、出題する問題を切り替える運用制御は特許出願しているという。2019年度入試からは英語や化学で音声、動画を用いた出題も計画している。

明星大学との高大連携事業で高校1年生が世界共通IT資格試験に合格

明星高等学校（東京都府中市）の1年生が、全世界共通のITスキル指標とされている「CompTIA認定資格」の一つ「CompTIA IT Fundamentals」に挑戦、見事合格した。受験にあたっては、高大連携の取り組みの一環として明星大学情報学部が主催する講座を受講し、基礎知識を培ったという。高大連携事業としての高校生での合格は東京都初となる。

「CompTIA IT Fundamentals」、通称「ITF」は、コンピュータシステムやネットワークなどITスキルの基礎を養う標準的な問題で構成されており、明星大学情報学部では次のステップである「ITパスポート」や「CompTIA A+」、「基本情報技術者試験」などに向けた自主的な学修への足掛かりとして取得を奨励している。同学部では、この資格取得に向けた講座を7年前から開設しており、高大連携プログラムとして今回初めて高校生の受講を受け入れた。

明星高校の生徒が「ITF」にチャレンジするきっかけを得たのは、総合学習の時間に実施された明星大学情報学部の教員とCompTIA日本支局のコンサルタントによる高大連携プログラムの特別出張講義。そこで興味を持った生徒2名が、同大学で実施された集中講座を受講する運びとなったという。

最終的に試験を受験したのは1名のみだったが、高校生での受講率はまだ低く、明星高校の生徒のチャレンジは大学内でも高く評価された。受講した2名はともに高校1年生で、「高校の情報の授業で習う内容と全く違っていたのが興味深かった」、「早い段階から資格にチャレンジしたほうが、その後の進路選択にも役立つ気がする」と、積極的な感想を述べた。

明星中学校･高等学校では、引き続き、早い段階から高大連携の取り組みに参加させることで、生徒の興味の幅を広げていきたいとしている。

金沢星稜大学がインターナショナルディを開催、海外の研究者らが研究発表

金沢星稜大学（石川県金沢市）は2017年10月14日、大学創設50周年記念イベントのひとつとして「インターナショナルディ」を開催。金沢星稜大学の国際交流センターとして2016年に設立された「グローバルコモンズ」に、海外から研究者等が集まり研究発表などが行われた。

午前中は、上智大学特任教授の吉田研作氏が「国際共通語としての英語に見る言語と文化の関係」と題し、基調講演を行った。また、海外から研究者等が来日し、語学教育、ツーリズム、文化などをテーマに発表。学生や教員からさまざまな意見・質問が寄せられた。

午後は海外留学を終えたばかりの人文学部国際文化学科の2年次生が、留学先の大学ごとに11の教室に分かれて報告会を実施。留学した学生の保護者のほか、これから留学生活をスタートする1年次生が参加し、留学生活に関する質疑応答も行われた。

オーストラリアの大学に留学した人文学部国際文化学科2年次T･Uさんは、「今回プレゼンの機会を与えられたことで、自分の留学の振り返りにもなった。私たちの発表を聞いた1年生が参考にしてくれるととても嬉しい」と語った。

金沢星稜大学では人文学部に所属する全学生が、帰国後の学びを充実させることを目的に、1年次後半から2年次前半という早期の段階で海外の協定締結校に留学。さらに、それぞれの学生のレベルに応じた英語力ステップアッププログラムや、海外留学をしやすくするためにクォーター制を導入するなど、グローバル人材の育成に力を入れている。

埼玉工業大学が深谷市の公道で自動運転の実証実験、12月から

埼玉工業大学（埼玉県深谷市）は深谷市の協力により、大学周辺の公道において、埼玉県内初となる自動車の自動運転に関する実証実験を行う。実験は、2017年12月1日～2018年3月31日まで。

埼玉工業大学は、2016年に創立40周年を迎えた。その記念事業として、ものづくり研究センターを設立し、次世代自動車を開発するプロジェクトを立ち上げた。その中に自動運転研究会を発足させ、自動運転に関する研究開発を行っている。

同プロジェクトでは2017年10月より、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラムである「自動走行システム」の大規模実証実験を開始。国内外の大手自動車メーカーと共に、私立大学では埼玉工業大学だけが参加している。

今回の実証実験の目的として埼玉工業大学は、エンジニアを目指す学生に、最先端技術の学びと貴重な経験の機会を提供したいとしている。また、深谷市で「自動運転関連産業」を育成し、市内外の企業や研究機関と連携しながら新たな移動サービスを市民に提案していくなど、まちづくりに貢献できる人材を輩出する狙いがある。

さらに、開発の技術課題として、夏から秋にかけて降水量が多い深谷市の自然環境に対応した、安全性の高い運転を支援する機能の実現も目指している。

自動運転の実験車両は、トヨタプリウスの改造車。エンジンの始動・停止、シフトの切り替え、操舵、制動、駆動、およびその他周辺機器はコンピュータを介して操作することができる。実験では、車体の内部や上部に、実験内容に応じた様々な装置を法律の範囲内で取り付けて自動運転を行う。

日本の大学・教育関連専門のニュースサイト
大学ジャーナル
UNIVERSITY JOURNAL
ONLINE
その他の詳しい大学関連ニュースは
大学ジャーナルオンライン　SEARCH
@univjournal　大学ジャーナルオンライン

英語での発信力を磨き、日本の広報力を高めることに貢献したい

山田　真梨子 さん
（2007年人文科学部卒）

卒業後は日本に帰国し、台湾のIT企業にて6年以上勤務、現在はイギリスの精密機器メーカーにて働いています。

子どものころから色々な人と話しをするのが好きで、高校では、海外交流が多い国際コースに通い、1か月短期留学や東南アジアの人とのキャンプなどを経験、もっと色々な国の人と会ってみたいと北米留学を目指すことになりました。高校卒業後は、北米生活に慣れるのとコミュニティカレッジという2年制の大学入学に必要なTOEFLスコアをとるのを目的に、まずカナダバンクーバーの語学学校に半年通いました。

最初から4年制大学に行かずに2年制を選択したのは、アメリカの4年制大学の学費が高いのと、せっかくなら良質な専門分野の授業を受けるために良い大学に行きたいと考えたとき、英語レベルと成績を伸ばして3年次から4年制大学へ編入（transfer）する道ならチャンスがあると知り、この道を選びました。

2年目の夏休み、編入先の大学を決めるのに西海岸だけではなく東海岸まで足を延ばして、有名大学の多くをこの目で見て回りましたが、最終的には、自分が興味のある国際関係学とビジネスの両方を学べる大学、しかも多国籍な環境を提供しているUSC（全米No.1）で国際関係学を学べること、また私立なので少人数で受講ができることを魅力的に感じ、USCへの編入を決めました。

USCは同族意識が人一倍強い大学で、卒業生のネットワークもとても強く、卒業すれば世界のどこへ行っても困らないとまで言われています。学費は高いですが、それに見合った面白いネットワークが得られます。私立大学である限り、どんなことをしても伝統を守り続けてくれるだろうとの期待もありました。

授業はとても大変で、特にリーディングの量が半端ではないのとそれを基にしてのクラスメイトとのディスカッションには苦労しました。毎週大量の本や資料が渡され、この時は日本の高校で学ぶ文法や長文読解をしっかりしておけばよかったと後悔しました。最近、日本の学校の英語教育では、「聞く」「話す」に注目が集まっているようですが、私の経験では、多読に耐える読解力・速読力・文法力は不可欠だと思います。その証拠に、日本でしっかり勉強してきた人は私に比べ、リーディングが得意なように感じました。ですから、これまでの日本の学校での英語教育が悪いとは一概には言えないと思います。

そして、授業とは別で週3回TA主導のクラスメイトとのディスカッションをしなければいけなかったのですが、自分の質問力の乏しさに、受け身の授業に慣れているのだと日米の授業の違いを体感しました。ただ、自分では思いもつかない意見や価値観には発見が多く、楽しさもありました。また、ビジネスの授業では、課題解決型のものが多く、多国籍の仲間たちと多様なアイディアを練りこんでプロジェクトを完成させるのも面白かったです。

USCの学部はアカデミックなものだけでなく、スポーツからアート、さらにはエンターテイメント系まで揃っていて、卒業生にはハリウッドの著名人などもいます。スポーツでは一時、オリンピックで獲得した金メダル数が、日本より多いこともありました。また富裕層の子弟も多く、独特の雰囲気があるのも特徴の一つといえるかもしれません。

この留学生活で得たのは、そんな独特な世界で培った多様性への理解、そこで生き抜くための忍耐力で、今現在でも私の人生に大きく影響していると感じさせられます。

現在まで、外資系の企業に勤めており、海外の製品を日本で広めるために、日本と海外の人たちのコミュニケーションを繋ぐという役目が多く、やりがいを感じてきました。

今後は、元々、日本のよさを海外の人たちに伝える仕事がしたかったこともあり、英語での表現力をよりブラッシュアップさせて、日本から海外に発信する業務に興味をもっています。

そのためには、英語はもちろんですが、ベースとなる日本語力が重要なことは言うまでもありません。日本語という言語は表現が豊かで、例えば「しとしと」「ぽつぽつ」などの擬態語も、直訳ではその繊細さは理解してもらえません。やはり相手の文化的な背景まで理解したうえで、どう伝えればいいかを突き詰める必要がありますし、それが発信力を高めることにつながるのではないかと考えています。

社会人になって10年以上たっても、いまだにやりたいことが尽きないのは、とても幸せなことです。そのルーツは留学をして得たところにありますから、USCに身を置けたことに非常に感謝しています。

USCで日本語と国際関係を学び、今は日本の大学の国際広報に貢献

東京大学本部広報課　特任専門職員
ウィットニー・マッシューズ
Whitney Matthews さん
（2008年人文科学部卒）

USCに入学すると、「あなたは今日からトロージャンファミリーの一員です」と歓迎されるように、USCはファミリーであることをとても大切にしています。卒業生の集まりなどに行っても、知らない人とでもすぐ親しくなれるのもそのため。当然、仕事を紹介しあうことも多くなるし、生涯のネットワークにもなります。

私は小さい頃から日本語に興味があり、大学進学に際しては、充実した日本語学習プログラムが多く、自然な日本語に触れられる機会も多いだろうと、西海岸を目指しました。南部のジョージア州出身ということもあったので、大学に入るのを契機にそれまでと違う環境・文化・人に出会いたかったのです。

USCに入ってから本格的に日本語を学び、3年次には1年間、交換留学で早稲田大学国際教養学部に学びました。卒業後は再び日本へ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科（GSAPS）で修士を取り、そのまま日本で就職し現在に至っています。

アメリカの大学の学費は日本の大学と比べて高い方ですが、奨学金は充実しています。自分のコミュニティの中でリーダーシップを示した人や、特殊な事情のある人に向けたものから、家族の中で最初に入学した人や、、同じ大学の卒業生がいる人を対象にした奨学金まで、様々なものが大学や民間企業・組織によって用意されています。留学生向けの奨学金もあります。

私は4年間、民間企業の提供する給付型奨学金を利用し、4年次にはワークスタディ制度も利用しました。学生が、大学の受付などの事務やチューターなど、用意された仕事をこなすことで大学から助成を受けるというものです。ただ、学費を全額賄うには程遠く、残りは学生ローンで払いました。もっとも、USCをはじめ多くの大学の卒業生には、社会人になってからかなりの年数、学生ローンを払い続けている人が少なくありません。中には定年まで払うという人もいます。

大学の勉強は、やはり名門ですのでとても厳しいものでした。また高校も私立の進学校で、必修科目は多く、しかも広範囲にわたっていました。たとえば物理学や微積分の授業から英文学や政治組織の授業まで、卒業するために受けなければいけない授業は様々でした。一方、大学のように選択科目もあり、私は鳥類学やジャーナリズムの授業も受けることができました。

授業以外では、高校のバレーボールチームに属したり、ボランティア活動などをしたり、SATやACTの受験勉強もしたりして、充実した高校生活を送りました。かなり忙しい時期もありましたが、USCでも、様々な分野にわたる必修科目がありましたから、大学に入る準備としてはとても大事な経験でした。

私は日本語との出会いから日本も日本人も大好きになり、今その日本で暮らしていますが、よく言われることですが、日本の文化ではコンセンサスが重んじられ、和を保つために自分の意見を言わないことが多い。これは場合によってはとても良いことですが、もう少し自分の意見を気軽に言えるようになればよいと思います。また、このこととどこかで通じるかもしれませんが、学生も社会人もリスクを取りたがらない傾向がある点が気になります。たまにはリスクを――たとえそれが計算されたものであれ――取る方が、ビジネスにも人生にもメリットがあると思いますから、もっといろんな場面でチャレンジ精神を発揮してほしいと思います。

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017

『はかせだものみんなちがってみんないい ～自分のキャリアを開くための「意思決定」のヒント～』が開催

10月19日から21日まで、名古屋にて博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017注1が開催された。そのなかで、名古屋大学・PhDプロフェッショナル登龍門注2の学生有志主催にて『はかせだものみんなちがってみんないい～自分のキャリアを開くための「意思決定」のヒント～』という企画が催された。同企画では、PhDプロフェッショナル登龍門を履修する近藤菜月氏をモデレーターとし、博士課程教育リーディングプログラム（LP）修了生4名:武居弘泰氏（大阪大学・超域イノベーションプログラム修了、現シスメックス株式会社）、白石晃將氏（京都大学・思修館プログラム修了・現外務省）、乾敏恵氏（同志社大学・グローバルリソースマネジメントプログラム修了・現パナソニック株式会社）及び金光慶高氏（大阪大学・生体統御ネットワーク医学教育プログラム修了・現IMS Japan）をパネリストに迎え、大学院生、大学教職員を含む約80名の参加者とともに、LP履修生が「新しいタイプのキャリア」を切り拓くためのヒントを探った。

昨今、大学院重点化による博士学位取得者の増加や、産業界における多様性及びイノベーションのニーズ拡大にともない、博士学位取得者の取りうる進路は多様化しつつある。既存のレールに縛られず独自のキャリアを開拓しようとするLP履修生には、このような時代の流れが追い風となる一方で、前例のない世界に飛び込むことに対する不安や葛藤もつきまとう。同企画中、「LP履修時にはどのようなことを意識して行動すべきか」「各LPにおけるリソースの効果的な活用法はどのようであるか」「進路に悩んだ際の判断材料、決断方法は何か」など、現役のLP履修生が抱える悩みや疑問がぶつけられ、試行錯誤の末に自分の道を見つけつつあるLP修了生のリアルな回答を聞くことができた。

モデレーターとパネリスト　左:近藤氏、中上段:武居氏、右上段:白石氏、中下段:乾氏、右下段:金光氏

パネルディスカッションは2部構成にて行われた。第1部は、「パネリストの進路形成・ストーリー紹介」と銘打って、各LP修了生が、自らのキャリア選択や、LP履修時の葛藤や模索、試行錯誤についてざっくばらんに語った。「各LPの履修科目を通じて自分のキャリア観が明確になった」「進路選択において重要な影響を与える恩師との出会いがあった」などLPを効果的に活用することが出来た例が挙げられた。一方で、「既に社会に出ている同期と比較すると焦燥感があった」「研究・専門性をどのように位置づけるか非常に悩んだ」というLP履修生独自の悩みや、「就職した現在においても、博士号取得者としての専門性や知見の明確な効果がまだ見られていない」「周囲は多くが文系の学部出身者で自然科学系の博士号取得者はほとんどいない」などLPを修了した今でも苦労しながら道を切り開いている状況が紹介された。モデレーターとの対談を通じ、一見「順風満帆な成功者」に見えるパネリストが、LP履修時、そして今現在においてもLP先駆者としての悩みを持ちながら奮闘している姿が浮き彫りとなった。博士学位取得者のキャリア形成には「正規のルート」が存在しないことが改めて強調された。修了生からは「怒られるまでやってみよう!」というメッセージから、前例がないことに臆せず挑戦することが重要であると勇気づけられたほか、「与えられた機会」を「将来につながる機会」として認識するアンテナをもつことが必要であるとのアドバイスなどもあった。

第2部は「全体討論」として、1）多様なキャリアを考える際に「博士学位」や「専門性」をどのように位置づけるか、2）バイタリティある人材を育成するために「LPができることは何か」という視点から活発な議論が展開された。両議題に対してパネリストから、「ある分野において課題を設定し、その解決に向けてアクションを取り、結果について評価をする。博士号の取得というのは、その一連のプロセスが出来る人に与えられるものであると考える」「LP履修にあたり自身の目的意識を明確化し、LPを効果的に'活用する'ことが重要である」といった持論が展開された。その後、会場の参加者を交えて議論を深化させた。LP修了生からは、海外の人類学者が、「自分は人に寄り添うプロ／専門家である」と表現したことに刺激を受けたというエピソードが紹介された。「専門性」や「能力」を自分の言葉で定義し、異なる分野においても自らの強みを見いだし、発揮できるようになることの重要性が強調された。また、専門分野で培う分析力に加え、LP履修によって得られる俯瞰力や先見性といった総合的な力の育成が重要であるとされた。

今回の企画は、修了生の声に刺激され、全国のLP履修生に「新しいタイプのキャリア形成」について考える機会を提供することができた。また、学びの主体である学生の視点から大学院教育を再考することの重要性が焦点化され、盛況のうちに幕を閉じた。なお、登壇者のプロフィールと当日の様子を撮影した動画は企画ウェブサイト（https://leadingforum2017-student.localinfo.jp）上で公開している。

注1　「博士課程教育リーディングプログラム（LP）」は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する事業（引用：日本学術振興会HP）。そして「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム」は全国30大学で実施されている62LPの教職員・学生関係者に加え、産業界、研究機関、行政機関、国際機関、アカデミアからの幅広い参加者とともに、LPの現状、将来とその展望について議論するプラットフォームとして位置づけられる。

注2　「名古屋大学・PhDプロフェッショナル登龍門」はフロンティア・アジアの地平に立つリーダーの養成を目的とした名古屋大学のオールラウンド型LP。なお、同企画に有志として集まった学生は以下のとおり。近藤菜月、加藤紫帆、鈴木健介、藤井亮輔、吉田圭介、Yuan CAO（以上一期生）、田中俊行、Kumar Arun SHARMA（以上四期生）